



旧古田行三邸とは

この建物は、明治5年に建築されたもので、当時の紙すきの家の形式を色濃く残しています。

建物は南に板取川を見るように建ち、天日乾燥のため南面に広い庭をとっており、紙しぼりの川屋があります。

住居兼作業場として長年使用してきた本美濃紙保存会初代会長の故古田行三氏は「本物の美濃紙は本物の建物で漉いてこそ」という哲学の下、長い歴史を有する自宅建物の維持に並々な精力を注いでこられました。

建物全体の造り、住居部分と作業場部分との合理的なつながり、作業場の仕様に見られる先人たちの創意から、美濃和紙が有する伝統の深みを感じてください。

交通のご案内



■お問合せ先 **美濃市産業振興部 美濃和紙推進課**
岐阜県美濃市1350 TEL.0575-33-1122

美濃和紙の里会館
岐阜県美濃市蕨生1851-3 TEL.0575-34-8111

平成27年度に岐阜県の補助金を受けて整備しました。

本美濃紙とは

奈良の正倉院には、わが国としては最も古い大宝2年(702)の美濃、筑前、豊前の三ヶ国の戸籍用紙が所蔵されています。中でも美濃の用紙は他の二国のものに比べ技術的に断然優れていました。中世には、京都の貴族や僧侶たちの手紙や記録の中に、美濃の紙の名が度々登場し、近世から現在にかけては、美濃は地域によって各種様々な和紙を生産する和紙の宝庫的な存在でもありました。このように華やかな時代とともに、1300年余りの間、磨き続けられてきた伝統の技は、今なお確実に受け継がれ現在に至っています。

本美濃紙の魅力は、柔らかみのある温雅な紙色と、陽の先に透かして見た時の繊維が縦横に整然と絡み合っている美しさです。

丹念に白皮まで処理された楮の原料は薬品を使わずに入念に加工し、桧板による天日乾燥を行うなど、一貫して昔ながらの自然な処理を心がけています。また、漉く際には「そぎつけ」とよばれる高級な簀を用いて、縦揺りに美濃独特の横揺りを加えた微妙で複雑な動かし方を行うのが特徴です。

現在、この伝統技術は本美濃紙保存会によって、保存・伝承の努力がなされています。

美濃手すき和紙の家 旧古田行三邸



本美濃紙のできるまで



1.水晒し
みずさら
 那須楮の白皮を、数日間、水に浸し自然漂白をさせるとともに、不純物を洗い流します。



2.煮熟
しやくく
 草木灰や、ソーダ灰を溶かした湯の中で、白皮を軟らかくなるまで煮熟します。



3.紙しぼり
かわや
 川屋と呼ばれる清らかな水の流れる所で、軟らかくなった白皮から丁寧に塵や傷を取り除いていきます。「ちりとちり」とも呼ばれています。



4.叩解
こうかい
 本美濃紙特有の木槌を用いて手打ちをすることで、白皮の繊維をほぐします。
 現在はピーターという機械を用いるのが一般的です。



5.紙漉き
す
 そぎつけという本美濃紙専用の簀を用いて、縦揺りにゆったりとした横揺りを加え、繊維を縦横に整然と絡み合わせ、柔らかみのある温雅な紙を漉きあげます。

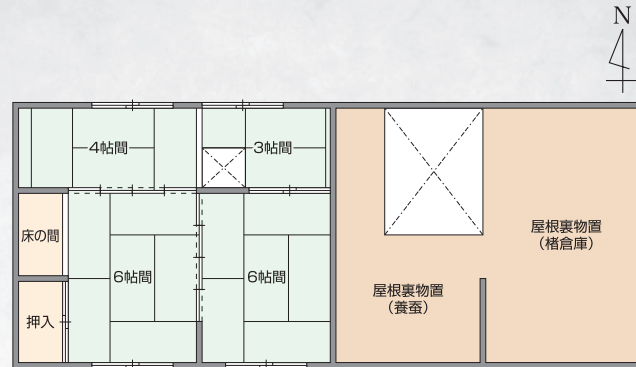


6.紙干し
 柄の木の一枚板に紙を貼り付け天日で乾燥させます。日光によって紙が自然漂白され、上品な艶と色合いを持つ本美濃紙の地合いに仕上がります。

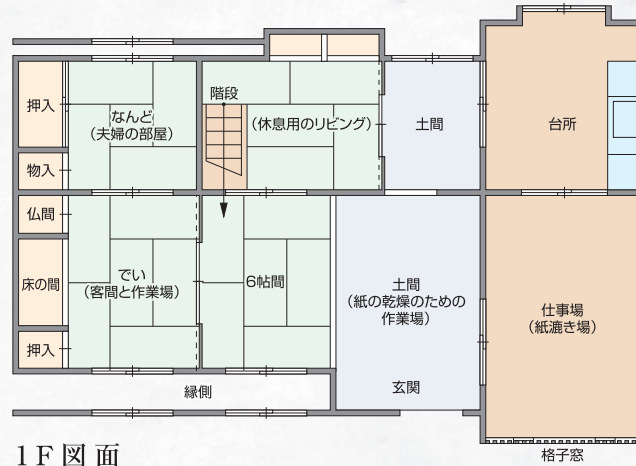


7.選別
 一枚ずつ陽の光にかざしながら、厚さ、地合い、傷、塵などを確かめ、厳密に分類された後に出荷されます。

屋内平面図



2F 図面



1F 図面



仕事場(紙漉き場)

2F



屋根裏物置(養蚕・楮倉庫)

二階部分

二階部分は、寝室兼物置ですが、土間の上部に相当する位置に養蚕の作業場と楮の倉庫があります。4月から9月は農業を行い、10月から3月は紙を漉き、5月から8月は養蚕というのが当時の生産農家の年間作業でした。

1F



土間(紙の乾燥のための作業場)

一階部分

玄関に続く広い土間は紙の乾燥のための作業場で、その右側は紙漉き作業場になっています。一階住居部分は台所、6畳間が3室、4.5畳間が1室からなっています。

南側の6畳間は「でい」と呼ばれる客間で普段は紙の裁断や選別の作業が行われていました。

来客は土間を通さず縁側から招き入れていましたが、これは家ごとの紙漉きの製法やノウハウ等を見られるのを嫌がったことの名残だという説もあります。

北側の6畳間は以前、囲炉裏があり休息用のリビングルームとして使われていました。

北側の4.5畳間は「なんど」と呼ばれ、夫婦の部屋として使われていました。

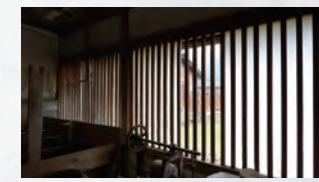


でい(客間と作業場)

作業場窓

紙漉きを行う作業場の窓は「堅格子」で、左右に移動する障子で明かりを取る構造になっています。これは明治初期より一般的に使われていた様式です。薄い和紙を通した自然の光が、紙の繊維の色を見極めながら、紙の厚さを揃えるのに最適であったといわれています。

また、この窓の両戸は2枚折れの「しとみ戸」という造りになっており、これも自然光をより多く取り込むための工夫であったと言われています。



格子窓



しとみ戸

【引用】名古屋造形芸術大学・名古屋造形芸術短期大学
 紀要 第8号-2002, 美濃和紙作業建物と道具の調査 / 八代美智子、佐藤弘喜 共著